

文化 第八十二卷 第三・四号 一秋・冬一 別刷  
平成三十一年三月二十九日発行

佐藤弘夫教授の業績と学風

片岡龍



## 佐藤弘夫教授の業績と学風

片岡 龍

本学大学院文学研究科、文化科学専攻日本思想史専攻分野の佐藤弘夫教授は、二〇一九年三月末日をもって定年により退職されます。

佐藤先生は一九五三年五月に宮城県伊具郡丸森町にお生まれになり、仙台第一高等学校をへて、一九七二年に東北大学文学部に入学されました。丸森町は宮城県と福島県の県境に位置し、先生のご先祖が戦国時代から幕末まで領主を務められた地です（この地の境界性を主題に、小説家の柳美里さんが先生との共著『春の消息』中で「境界の城」と題して、佐藤家の歴史を記しています）。先生はこの地で十歳まで過ごされたそうです。先生は、その時の自然とのつきあいや、共同体行事の記憶が、先生の学問の根底に働いているように思われます。

大学入学当初には、神秘思想などへの関心からドイ

ツ文学を専攻することも考えられたようですが、大学紛争後の思想的雰囲気なかで、近代における日蓮主義の運動に関心を移され、卒業論文「日蓮の思想形成と真言排撃」では、中世の日蓮の思想自体へと遡って論じられました。ここには、直面する時代の課題に学問を通して真摯に向きあおうとする先生の一貫した学風の端緒が、すでに垣間見られるように思います。

一九七六年に同学部（日本思想史研究室）を卒業、そのまま東北大学大学院文学研究科博士前期課程（国文学国語学日本思想史専攻）に進学し、七八年に同課程を修了されると同時に、東北大学文学部附属日本文化研究施設の助手に採用されました。つまり、先生は博士後期課程を「飛び級」して、国際的にも錚々たる研究スタッフを誇る研究機関に、一躍抜擢されたわけです。このことは、どれほど先生の学問が早熟で

あったか、いかに周囲の高い評価を得ていたかをよく示しています。実際に、博士前期課程のときに卒業論文の一部を活字化して発表された「日蓮の後期の思想」（一九七七年）が、日本思想史分野で最も権威のある学術誌（『日本思想史学』）に掲載された事実からも、それは証されます。

ひきつづき、一九八五年に盛岡大学文学部講師に転任されるまでのあいだに、中世仏教史の再構築を目標に、「初期日蓮の国家観」（七八年）、「初期真宗における末法観の変容」（七九年）、「中世仏教における法然の宗教の位置」（八〇年）、「鎌倉仏教における仏の観念―日蓮を中心として」（八一年）、「初期日蓮教団における国家と仏教―日像を中心として」（八二年）、「中世仏教における仏土と王土」（八三年）などの重厚な論文が、陸統と発表されていきます。

これら最初期の研究の集大成が、先生が三十三歳のときに刊行された『日本中世の国家と仏教』（八七年）です。同書は、中世思想史研究を代表する大隅和雄氏によって吉川弘文館の「中世史研究選書」の一冊に推薦され、また、それからほぼ四半世紀後の二〇一〇年には、同出版社の「歴史文化セレクトション」として再刊されました。

『日本中世の国家と仏教』という題名は明らかに、中

世史の権威である黒田俊雄氏の『日本中世の国家と宗教』（七五年）を意識されたものです。黒田氏の「顕密体制論」は、それまでの古典的な「鎌倉（新）仏教論」を一掃し、中世思想の研究にたいして圧倒的な影響を及ぼしました。若き先生は、まさに真正面から黒田氏の論に挑まれたのです。

政治過程と社会構造の総体を視野に入れて、伝統仏教が果たした役割の重さを論じる「顕密体制論」は、それが潜在的に志向していたはずの「新仏教」の再評価を十全に達成していないとの先生の鋭い着眼と、その不備を具体的な論証によって乗り越え、中世仏教の全体像の再構築をめざされた気迫の大きさは、まさに後学が見習うべき姿勢であると考えます。

ひき続き執筆されたレグルス文庫の『鎌倉仏教』（刊行は九四年だが、実際の執筆は八八年頃。―ちくま学芸文庫版「補論」参照）も「新仏教論」の再構築を目的としたものですが、同時に法然・親鸞・道元・日蓮らの確立した宗教が、実際に人々のあいだにどのようなに受容され、いかなる役割を果たしたのか、すなわち鎌倉仏教が名もなき民衆によってどのようなに生きたのかという問題を、平明かつ情熱的な筆致によって論じられたものです。

先生は、学生の指導などの場面でも、専門研究の成

果をいかにわかりやすく伝えるか、また研究は感動に支えられたものでなければならぬことを、繰り返し強調されました。『鎌倉仏教』中の「彼らはみな、思想家である前に実践者であった。彼らは象牙の塔に閉じ籠って、体系的ではころびのない思想を構築することを最終的な目的とは考えなかった」、「日蓮と熱原の農民たちとの魂を結ぶ絆に比べると、プロの僧侶間の教理の継受といったテーマが、いかに色あせてみえることか。(中略)ひとたび、教団の維持しか頭にない聖職者たちの手にもてあそばされた教理は、次には民衆にとっての抑圧の言説と化してしまう」といったフレーズは、鎌倉仏教に関して述べられた語ですが、先生ご自身の学戒でもあり、後続の研究者にたいする頂門の一針です。

同書の刊行以降、先生は研究の重心を、イデオロギー論を射程に置いた中世仏教史の再構成から、仏教や神道といったジャンルを超えた列島の精神世界の全体像(コスモロジー)の再現へと大きくシフトされます。これは、依然として黒田理論の枠内で精緻化を競いつつ、しだいに先細りしていく中世思想史研究の将来を予感し、その流れに抗するための準備だったのではないでしょうか。実際に、二〇一〇年に『日本中世の国家と仏教』が再刊され、二〇一四年には『鎌倉仏

教』も再刊(ちくま学芸文庫)されている事実は、先生の初期の研究のもつ先駆性と時代を超える学術的価値が、より広範な知識層からあらためて再評価されていることを示しています。

先生は、一九九〇年に盛岡大学文学部助教に昇任された後、九二年に東北大学文学部に助教として赴任されました。二〇〇〇年一月には、八〇年代後半から九〇年代前半の研究成果をまとめられた『神・仏・王権の中世』によって博士(文学)の学位を東北大学より取得、翌年に同大学院文学研究科教授に昇進され、今日に至っています。ご在職の間、先生は終始一貫して職務に精励され、二〇一一年から一四年までは東北大学ディステイングイッシュトプロフェッサー、また同大学史料館館長(二〇一二〜一四)、文学研究科長並びに文学部長(二〇一四〜一七年)などの要職を歴任し、大学の運営に多大な貢献をされました。

学外においても、科学研究費委員会専門員、〇〇分野別評価部会委員、日本学術会議連携会員、日本と東アジアの未来を考える委員会委員などを歴任され、日本思想史学会の会長の要職も務められました。また、海外の国際学会・国際シンポジウムの招待講演を多数行われ、インドネシア大学の客員教員を務められるな

ど、思想史を中心とした学術分野の発展と国際交流の推進に、大きく貢献されました。

以上の学内外におけるご活躍は、あくまで氷山の一角にすぎません。たとえば、先生は日本仏教の総合的研究の道を開いた日本仏教研究会（一九九二～二〇〇一。のち日本仏教総合研究学会）を、世話人の一人として発足、発展させられました。同会は、それまでほとんど交流のなかった日本仏教研究の諸領域（日本史・仏教学・宗教学・民俗学・美術史など）を結びつけ、従来の日本仏教研究を革新させた、いわば伝説的な研究会で、その成果は『日本の仏教』（第Ⅰ期六冊・第Ⅱ期三冊、法蔵館）にまとめられています。

また、二〇〇一年からの四年半は、九名の編集委員・二九名の執筆者を組織して、日本思想史の定番の入門書となる『概説日本思想史』（二〇〇五）を刊行されています。同書は海外でも翻訳され、「日本思想史」の市民権を、国内のみならず国際的にも確立させることに成功しました。二〇一二年から一五年にかけては、『日本思想史講座』（全五巻、ペリかん社）、『岩波講座 日本思想』（全八巻）という二つの講座シリーズの編集を同時に担当されています。そのほかいちいち数え上げることはできないほどの共同の学術活動において、先生は何度も泊まりがけを含む会議を重

ね、熱く飛び交う議論を、上手にまとめていかれました。

このような多忙なご業務のあいまに、先生は単著だけでも十三冊、共編著をふくめると五十冊を超える著書、さらに二百本近くの論文、百回を超える学術講演という、同分野の他の研究者の追隨を許さない膨大な研究成果を生み出されました。これは、その学内外の激務のようすを傍らで眺めていた者にとっては、まさに奇跡としか表現しようのないものです。

二〇〇〇年には、『神・仏・王権の中世』（九八年）をもとにした『アマテラスの変貌―中世神仏交渉史の視座―』を刊行されています。同書においても先生は、最新の問題意識に基づく最先端の研究を、いかに多くの人々と共有できるか、さまざまな工夫を凝らされ、特に中世的コスモロジーを印象づける多くの図像や風景写真を掲載し、また「ある個人的な回想」と題するエピソードに、幼少時の異世界（？）経験を記されています。

こうした試みは、のちに続く『偽書の精神史―神仏・異界と交感する中世―』（二〇〇二年）、『霊場の思想』（〇三年）、『起請文の精神史―中世世界の神と仏―』（〇六年）、『神国日本』（〇六年）、『死者のゆくえ』（〇八年）、『ヒトガミ信仰の系譜』（一二年）、『死

者の花嫁―葬送と追想の列島史―（一五年）などにも引き継がれ、先生が各地の霊場などをフィールドワークしてカメラに収められた印象的な写真と、本論に深みを与える個人的経験が、どのように巧みに散りばめられているか、そこに籠められた学術的含意を推察することは、新刊が出るごとの後学のひそかな楽しみとなりました。

二〇〇〇年を少し回った、五十路の坂を越そうとされる頃から、先生は「残された研究者としての人生を賭けるべきテーマ」を、「死」と「カミ」という二つの課題に定められたと言います（『ヒトガミ信仰の系譜』『あとがき』）。上記の著書群は、まさにこの二つの課題の核心に、一步一步近づいていかれた痕跡です。特に二〇一一年の東日本大震災を契機に、先生は「死」と「カミ」という人類永遠のテーマをさらに深められ、世界レベルでの最先端の研究を展開されています。

先生のご研究の特色は、骨太の議論と明晰な論理展開にあります。それは専門領域を超えて「人間とは何か」という人文科学の根本的問題に挑戦しようという壮大な学問意欲に裏打ちされています。次のように、先生は述べられています。

到達すべき終着点は見えませんが、正しき答えも最初からわかっているわけではありません。終着点や正答が果たして存在するかどうかさえ不明です。ゴールそのものを見つけることが答えではなく、問いを発見することが学問の究極の目的です。そして専門の研究者も含めてほとんどの人は、目的地も答えも発見できないままに、途中で研究を終えざるをえないのがこの学問の特性なのです。／＼しかし、だからといって一定時間没頭し積み上げた学問的な訓練が無駄になるとは思いません。先人の残した知識や知恵に対する根底的な問いかけは、人間の偉大さと尽きることのない学識に対する深い畏敬の念を呼び覚ましてくれます。私たちに自身の無知を痛感させると同時に、真に尊敬すべきものが実在することを気づかせ、人生に対する謙虚な姿勢を教えてください。（『起請文の精神史』『あとがき』）

「死」と「カミ」をテーマにした先生の著書の多くが、諸外国語に翻訳され、国内外に多くの愛読者をもっているのも、このような人生にたいする謙虚な姿勢と、学問にたいする深い信頼をもって、人類普遍のテーマに挑戦されているからではないでしょうか。

なお、先生の単著にはほかに、『日蓮—われ日本の柱とならむ—』（〇三年）、『日蓮「立正安国論」…全訳注』（〇八年）という日蓮関係の二冊がありますが、前者は伝記、後者は訳注であって、卒業論文以来の日蓮の思想に関する諸論文は、これまで執筆されたご著書の中には、意図的に収められていません。これは、いづれ日蓮で大きな論文集をまとめたいとの構想があるからだそうです。

先生にたいする一般的な評価としては、へ中世人の精神世界を中心に、コスモロジーの変容を軸として、古代から現代に及ぶ射程をもつ斬新な日本思想史像の構築者」とでもまとめられるでしょうか。しかし、それはまだ先生の学問の全貌ではありません。「死」と「カミ」という二つの柱をもとに、また「日蓮」の思想と運動という源泉から、日本思想史といった枠組みを遙かに凌駕して、どのような雄壮な山脈が人類の知的地平に隆起してくるのか、われわれはいまだそれを注意深く見守っていなければならないようです。